

# チームで取り組む特色ある教育活動の実践（H29年度千塚小の実践）

～学校が目指す児童像の実現に向け、チームとしてどのように願いや評価を生かし、組織的に教育活動の改善に取り組んでいったのか、その実践発表～

栃木市立千塚小学校 校長 山田裕之

## 1 はじめに



この栃木市教育研究発表会での発表（紙上）は、今回で4回目となる。過去には、前任校（小規模特認校）での特色ある教育の推進についての実践事例等を発表した。今回は全校児童148名、教職員数17名の千塚小において、学校がどのように目標を共有化し、組織がチームとして一体的にその実現に向けて具体的な取組を行い、評価・反省を生かして特色ある学校づくりを進めていったか、まとめてみたい。多くの学校で既に取り組んでいる内容もあると思うが、少しでも参考にさせていただければ有り難い。

## 2 チームとしての学校が求められるわけ

学校の現状とこれからの課題は山積している。まず教員の多忙化が問題となり、「働き方改革」検討会等が立ち上がりつつあるが、職員数減と校務の増加・多様化により、まだその軽減と解消には時間がかかるだろう。また学校はこれから教員の世代交代が急激に進み、教育の質の維持・向上には工夫と努力を要するだろう。また職員も正規の常勤職員だけでなく、職務や雇用形態・勤務時間も様々な職員が今後も益々増えていくだろう。更に学校には学級王国と揶揄されるように、担任の子どもの囲い込みや自身の指導方針へのこだわりから、組織的な教育に対し、必ずしも協力的な教職員ばかりでもなく、学校のチームワーク阻害の要因となっている場合もある。

こうした背景を受けて、複雑化・多様化した課題を解決し、また新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育てていくための指導や授業改善を推進していくため、カリキュラム・マネジメントを通じた組織改善と組織体制の整備が必要であり、「チームとしての学校」が求められるようになってきた。

## 3 「チーム学校」とは

「チームとしての学校」実現のための具体的提言として、（1）専門性に基づくチーム体制の構築（2）学校のマネジメント機能の強化（3）人材育成や業務環境の整備等が挙げられている。（1）は、いじめや不登校対応、特別支援教育、ICT教育、アレルギー対策など、年々教員に求められる負担が増え、教員の多忙化につながっていることから、専門スタッフや地域人材等を活用し、チームとして適切な役割分担を行い、諸課題に対応していくという提言。（2）はリーダーシップ機能を強化し、学校の様々な職員・組織を束ね、学校組織全体が、同じ目標に向かって一つのチームとして力を発揮することで、学校組織全体の力を高め、学校教育の質の向上を図ろうという提言である。本校においては、積極的な外部人材活用や学校運営協議会、家庭との連携を図りつつ、カリキュラム・マネジメントを通して学校組織の活性化と強化に努め、学校がチームとしての一体感を持って、特色ある教育活動の推進を図っていこうと考えた。

#### 4 特色ある学校づくりをめざす

まず、「チーム学校」を育てるために、「特色ある学校づくり」をめざそうと考えた。それぞれの学校には、地域や長い歴史、歴代校長等によって生まれ培われた教育理念や方針、また毎年改善を重ね、学校の特色にもなっている行事や教育活動などがある。それらのよい部分は尊重し、継承していくことは大切なことであるが、社会や求められる教育の変化に柔軟に対応し、より質の高い教育を目指すには、この「特色ある学校づくり」への組織的な取組が、とても重要であると考えた。特色ある学校づくりのために、まず改めて自分の学校の長所・短所や背景・資源、子どもの実態を見直し、どのような学校にしていきたいのか、どのような教育をしていきたいのかを明確にし、その過程の中で、教職員の意見交換や話し合いを通して学校経営参画意識を高め、組織の活性化と、学校の創意工夫が活かされる組織づくりをしていきたいと考えた。

#### 5 学校の目指す児童像を考える

「チーム学校」を目指すためには、まず教職員・保護者・児童自身・地域の方々にも理解しやすいできるだけ具体的な目標を示す必要がある。そこで、学校として中・短期的に、どのような子どもを教育活動全体を通して育成していきたいのか、めざす児童像を定めた。本校のH29年度の目指す児童像は下記の通りである。

教育目標	美しさのわかるやさしい子ども	よく考え勉強する子ども	健康でたくましい子ども
本年度の目指す児童像	○あいさつや返事がしっかりできて、礼儀正しい子 ○互いによさや努力を認め合い、思いやりのある子	○人と積極的に関わり考えを広めたり深めたり学び合いができる子	○めあてに向かって努力し、成長できる子

学校教育目標の知徳体に対応した本年度の目指す児童像は、国・県・市の指針や保護者・地域の願いを十分考慮し、学校としてどのように具体的に子どもたちを育てていこうとするのか、教職員の話し合いのもとに策定した。徳では、思いやりの心を育てるため、人の親切や優しさ、がんばりを見つけて素直に認められる子、知では、人との関わりの中で考えを広げたり深めたりできるよう、人と意欲的に関わったり、発表や質問が積極的にできる子、体では、めあてに向かって日々努力し成長が実感できる子、更にあいさつがしっかりできる子の4つに定めた。この目指す児童像の共有こそがチームワークの原点であり、この見直しと策定は、年度末に時間をかけ、全体で行っている。ちなみにH28年度の目指す児童像は下記の通りで、話し合いにより毎年少しずつその内容は変わっている。

教育目標	美しさのわかるやさしい子ども	よく考え勉強する子ども	健康でたくましい子ども
本年度の目指す児童像	○あいさつがしっかりできる子 ○だれとでも仲良くし、互いに認め合える子	○よく話を聞き、自分の意見や考えが言える子	○めあてに向かって努力する子

#### 6 目指す児童像を育成するための具体策と成果

それぞれの目指す児童像育成のために、本校の3指導部（児童指導・学習指導・体育と保健給食）が中心となって、本年度重点的取組の具体策を考え、実践した。特に効果が高かったと思われる実践について、いくつか紹介したい。（次項重点的取組の太字項目具体策）

本年度の 目指す児童 像	○あいさつや返事がしっかりでき て、礼儀正しい子  ○互いによさや努力を認め合い、 思いやりのある子	○人と積極的に関わり、考えを広めた り  深めたりし、学び合いができる子	○めあてに向かって努力し、成長で き る子
重点的 取組	<p>(1) あいさつ・返事がきちんとできる子を育成する。</p> <p>○「ありがとう・ごめんなさい・失礼します・お待たせしました」など、人を気遣う言葉がきちんとできる子を育成する。</p> <p>(2) 異年齢交流活動等により、思いやりやリーダーシップを育成する。</p> <p>(3) 「ありがとうの木」を活用し、互いに親切やよい行い、努力等を見付け、認め合うことができる子を育成する。</p> <p>○「思いやり・親切」を重点とした道徳的実践力の育成を図る。</p>	<p>(4) 音読や暗唱など、相手に伝わりよう、人前で声を出す機会を積極的・計画的に持つ。</p> <p>○発表したり、意見・質問を述べたりする機会を、積極的・計画的に持つ。</p> <p>(5) ICT機器等を積極的に活用したりし、学んだことや調べたことを意欲的・効果的に伝えるプレゼンテーション力を育成する。</p> <p>(6) 授業や集会等様々な機会に意見交換や学び合いなどの場を設け、主体的・協働的に課題を解決する力を育成する。</p> <p>(7) 多様な人と、ふれあいや、話を聞き質問する機会などを積極的・計画的に持ち、コミュニケーション力の育成を図る。</p>	<p>(8) 適切なめあての設定と、定期的・計画的な振り返りを行わせ、めあて達成のための努力を認め、賞賛する。</p> <p>○運動・学習など、がんばりカードなどを積極的に活用し、意欲の向上を図る。</p> <p>(9) 意欲的に取り組み、自らの努力や成長が実感できる、よい達成目標の設定や紹介を行う。(検定・達成証・合格証など)</p> <p>○学校と家庭で連携し、めあて達成のための努力を認め、励まし、支援する。</p> <p>(10) 目標に向かって、進んで体力づくりや、健康・安全な生活が送れる子を育成する。</p>

### (1) あいさつ・返事がきちんとできる子を育成する。



あいことばは あおいきじ

あいさつは今までも常時指導を行い、登下校時は職員が校門で声掛けを行ってきた。今回は児童の意識化を全校で図ろうと児童会が発案し、曜日を学年毎に割り振って、任意参加で朝のあいさつ運動を行った。あいさつのスローガンとして、**あ**いての目を見て **お**おきな声で **い**つも明るく **き**もちをこめて **じ**ぶんからの頭文字を取って、「あおいきじ」のマスコットを作り、呼び掛けを行った。またあいさつ運動に参加してくれた子には運営委員があいさつ免許証を交付し、シールを貼るなどして賞賛した。その結果、あいさつ運動が定着し、元気な声が響くようになってきた。

### (2) 異年齢交流活動等により、思いやりやリーダーシップを育成する。

異年齢交流活動は、多くの学校で行われていると思うが、清掃や共遊など、異学年と一緒に過ごす場や機会を持つだけでなく、活動目的（思いやりやリーダーシップ育成）を明確にし、今まで行われてき

た活動を目的に沿って内容改善することで、その積極的育成を目指した。

本校では、今まで8名程度の異年齢グループを20作り、年間数回の交流を行ってきたが、このグループを活用し、全校遠足や各種集会、月1回程度の共遊など、積極的にこの異年齢グループでの活動を位置付け、交流の場を増やしていった。これらの活動を通して、普段の休み時間も異学年で誘い合って遊ぶ姿が増えた。①



①

思いやりや、教え合ったり助け合ったりする場を意図的に設定するため、小中交流活動（吹上中の千塚小卒業生が来校し在校生と交流）の内容を大幅に変更し、異年齢グループでの校内ウォークラリーを行った。今までは各学級に中学生が分かれて学習支援等を行っていたが、今回は20の異年齢グループが、校内の20のミッションを協力して課題を解決し、得点を競うことで交流が図れるよう計画した。②はグロッケンでチューリップを演奏する課題を中学生が教えているところ ③は算数問題をみんなで協力して解いているところ。（問題は、「池にはあひるとかめがあわせて9匹います。足の数はあわせて26本です。あひるとかめは、それぞれ何匹いるでしょう。」）他にもパズルや記憶力テスト、折り紙、お絵かきしりとりなどがあり、協力し合って解決していく課題を用意した。また地域の方を招いて子どもたちと交流するふるさと交流学習も例年行っているが、今回は低・中・高のブロックに分かれて



②



③



④

活動内容をそれぞれ工夫し交流を図った。高学年ではリーダー育成を兼ねて事前にレクリエーションゲームを指導し、グループ毎に地域の方々に入ってもらい、子どもたちだけの司会・進行で楽しくレクゲームで交流を図った。高学年児童へのレク指導は、その後の異年齢活動でも生かされ、リーダーシップの育成につながった。④

### （3）「ありがとうの木」を活用し、互いに親切やよい行い、努力等を見付け、認め合うことができる子を育成する。



人と異なること、目立つことを批判的に見るのではなく、その人なりの努力やよい行い、また親切をきちんと認め、紹介し合える優しい子に育ててほしいとの願いから、「ありがとうの木」の取組を全校で行った。学年に応じて定期的に紹介し合ったり、または帰りの会等で発表したものを昇降口に掲示し、学年を越えて、その親切や努力を紹介し合った。掲示された書き込みには、「かえらさんのいいところは、姿勢がいいところです」1年男子、「登校班長さんへ。いつも登校の時心配してくれてありがとうございます」2年女子、「ダメなことをしてしまった時、ちゃんと注意してくれてありがとう」3年男子、「わたしが落ち込んでしまったときに励ましてくれてありがとう」3年女子、「困っているときに相談のってくれて、いつも朝声を掛けてくれてありがとう」4年女子、「ぼくがメガネをなくした時、みんなで一生懸命探してくれてありがとう」6年男

子。普段は言葉に出して言えないことでも、この書き込みを通して友だちのよさや感謝の気持ちを伝えられる場となり、思いやりの育成につながりそうである。

**(4) 音読や暗唱など、相手に伝わるよう、人前で声を出す機会を積極的・計画的に持つ。**



九九カード(九九の暗唱) 2年(いよいよ!)

題名	1	2	3	4	5	6
6のたん	😊	😊	😊	😊	😊	😊
7のたん	😊	😊	😊	😊	😊	😊
8のたん	😊	😊	😊	😊	😊	😊
9のたん	😊	😊	😊	😊	😊	😊
6~9ばらばらカード	😊	😊	😊	😊	😊	😊
各種シール	😊	😊	😊	😊	😊	😊

人と進んでコミュニケーションを取ることができる子の育成のため、まず相手に伝わるよう、人前で声を出す機会を積極的に持つと考えた。そこで国語部が企画し、音読集会で学年毎の群読発表を行ったり、昼食時に（本校では給食は全校一緒にランチルームで取っている）、一人一人が詩などの朗読や暗唱を順番に全児童が行ったりした。特に一人の暗唱はマイクを使わず全校生の前で行うのでかなり練習と勇気を要するが、低学年は大きな声で、また高学年は思い思いに選んだかなり長い詩などを堂々と暗唱し成果が見られた。

更に低・中学年を中心に、人と関わる練習も兼ねて、担任以外の先生にも協力いただき、詩の暗唱を聞いてもらってがんばりカードにサインをもらい、意欲付けを図った。学年に応じた複数の詩などをそれぞれ違う先生に6回ずつ聞いてもらわなければならない、合格するまで子どもたちは職員室に通ったが、ほとんどの子がよく意欲を持って取り組むことができた。2年生はかけ算九九の定着にも、この暗唱チェックを活用し、どの子もすらすら暗唱できるよう、順・逆・ばらばらでの暗唱を繰り返し行った。チェックをする先生もそれぞれサインを工夫したり、励ましや賞賛の言葉掛けをしたりし、子どもたちが意欲的に取り組めるよう支援した。

**(5) ICT機器等を積極的に活用したりし、学んだことや調べたことを意欲的・効果的に伝えるプレゼンテーション力を育成する。**



ICT機器の導入は、全校で無線LANや大型モニター・PCが各教室で使用できるようになり、児童も中学年当たりからプレゼンソフトを使ってどの子も発表等に活用できるようになってきた。本校ではICT機器を更にフィールドワークやグループワークでも活用し、子どもたち自身が学習の中で「検索」「調査」「取材」「まとめ」「話し合い」「意見交換」「発表」などでより積極的に活用できるようにと、iPadを3年計画で導入している。ICT機器を導入する際、一番の課題

は、指導者自身の経験とスキルの差が大きいことであると思う。つまり活用する学級とそうでない学級差が大きい。そこで、3年計画で徐々に数を増やし、活用事例を互いに参観したり、授業研究会で意図的に活用場面を入れてみたりし（本年度防災教育研究授業でも導入）、職員・児童の活用スキルを徐々に上げていった。来年度にはiPadは12台が整備され、テレビとつながる無線のアップルTV2台、有線のアップル・ライトニングAVアダプタ3台も購入し、子どもたちが取材・話し合い・まとめ等をした画面が即時に学級で共有できるようになる。（ちなみにiPhoneにも対応しているため、教師が取材した動画等も即時画面で見ることが可能。）

**(6) 授業や集会等様々な機会に意見交換や学び合いなどの場を設け、主体的・協働的に課題を解決する力を育成する。**

学びの中で、子どもたちが話し合いや協力を通して考えを広げたり深めたりすることは、今後益々重